青森市男女共同参画情報紙
―性別・世代・時代を超え

Un jour アンジュール

「アンジュール」は仏語で「ある日」の意味です

これからの男女共同参画を考えるシンポジウム パネルディスカッション

ダイジェスト版

男女共同参画都市青森宣言から１５年目の平成２３年１０月２３日、青森市は「これからの男女共同参画を考えるシンポジウム」を開催しました。市民の代表によるパネルディスカッションでは、昨年７月に実施した「青森市男女共同参画に関する市民・事業所意識調査」の結果をもとに、パネリストの本宮彰さん（(株)ＪＲ東日本青森商業開発代表取締役社長）、沼田桃子さん（司法書士）、出崎真里さん（青森市生涯学習推進員）、コーディネーターの白井壽美枝さん（ＮＰＯ法人あおもり男女共同参画をすすめる会理事長）が熱いトークを繰り広げました。今回は、その模様をダイジェストでお届けします！

男女平等意識

うちの中ではやっぱり女の方がやることが多い。

白井 意識調査では10年前に比べ平等に近づきましたか？と聞いています。全部で半分以上の人が「近づいた」と答えています。

本宮 意識はやっぱり変化してるなと感じます。私の周りも女性が元気よく働いている職場で、青森駅前の「ラビナ」、新青森駅の「旬味館」、そして「A-FACTORY」、働いている方は女性の方が多いんですね。青森というのは、女性が元気よく働いていらっしゃる、東京なんかよりも実は、働く意欲、働くチャンス、環境が整っているのかなと漠然と感じておりました。

しかしながら、これは見た目の話であって、組織的な受け皿が完全なのか、社会的な意識がどうなのか、こういうところはまだ考えなければいけないのかなと思っています。

沼田 私どもの職業は、一般の、使われて働く女性とは違って、資格を持った一匹狼の世界なものですから、男女共同と言われたときに、逆に、女でよかったなという経験の方が多かったです。

女と男は必ず世の中にいるわけで、その半分の女性も、日々、みなさん悩みとか問題を抱えてらっしゃる。弁護士や司法書士は、敷居が高いとか、とっつきにくいとか、そういうイメージがどうしてもあるみたいで、女性は女性に聞いてほしいっていう需用がたくさんあるんですね。それから離婚だとか、セクハラだとか、ＤＶだとか、まさに女性ならではのデリケートな問題は、やはり女性に聞いてほしい。法律の世界は、まだまだ女性が少ないですが、それだけに貴重な存在だなと実感しているところです。

一方、家庭に帰ると、私もフルタイムでこんなに忙しく働いているのに、うちの中ではやっぱり女の方がやることが多い。帰ったとたん、山積みの家の仕事、育児、やはりそれはどうしても女に比重がかかってくるので、そこはまだまだだなと。うちの主人は物分りがいい方なんですが、うちでもまだまだだなと。

2012.2.　No.40

中面へつづく

ニュースの目

女性と災害

～なぜ、「女性」と銘打つ必要があるの？～

東日本大震災の余震が続く盛岡市で、「地震の影響による停電中に男性が女子学生宅に侵入し強姦したという容疑で逮捕」の報道があった（讀賣新聞 4/8）。阪神淡路大震災(1995 年)時に性暴力被害が発生しており、その教訓に基づいて、災害時の女性の安全への取組みがなされてきた。災害時における女性への人権侵害の回避は、中越地震(2007 年)でも重視された課題であった。授乳や着替え、洗濯物干場、生理用品の受渡しなど、女性への配慮はその一環だ。

また、災害という非日常時は、日常では明らかではない社会的性差や男女の差が明らかになり、強いられもするという指摘がある。「女性だから」雇用を止められた、避難所で嫁や母の役割を優先せざるを得ず出社できずに管理職の場を奪われたケースもあった。固定的性別役割分担意識に追いつめられるのは女性たちばかりではない。「男性だから」不眠不休で働き続け過労で身体を壊した男性、病気で動けないが「男なのに」力仕事に出かけない負い目に苦しんだ男性もいた。

今まで見えなかったものを明らかにするためにも、防災・災害復興の意思決定の場に女性が参画することが大事である。防災分野にも男女共同参画の推進が求められている。

「男女共同参画都市」青森宣言

私は私を大切に思うのと同じ重さで
あなたを大切に思う

性別を超え
世代を超え
時代を超え
人と協調し　人を信頼できる
誇り高い人間でありたい

すべての人の自立と平等をめざして
青森はここに「男女共同参画都市」を
宣言します。

平成８年 10 月 22 日　青森市

つながりの輪が取り戻した被災者の笑顔

～青森市働く女性の家「アコール」を舞台にした、県外避難者との心の交流～

「つながろう会」のみなさん

青森市男女共同参画プラザ「カダール」（新町一丁目）では、昨年９月、震災支援に関する講座「あなたも支援者になれる」を開催しました。現状を知りたい、何か自分にもできることはないかと集まった人たちを前に、県外からの避難者の一人新川真由美さんは、「避難者が集える場所がほしい」と語りました。

避難者の方々のお役に立てるのであれば、と、青森市働く女性の家「アコール」（勝田一丁目）が避難者同士の交流の場の提供を申し出、新川さんが発起人となって、東日本大震災からちょうど８か月目に当たる昨年11月11日、初めての会合が開かれました。福島、岩手、宮城から避難してきている、赤ちゃんから各世代の20人余が集まりました。

その後も毎月会合が持たれ、避難者同士の話合いのほか、市の雪対策を聞いたり、青森の郷土料理「けの汁」をつくったり、クリスマス会を開いたりして交流を行っています。「この場所があってよかった」（参加者の方）。会の名前は「つながろう会」。会合には、さまざまな人がボランティアで関わっています。「一人でも参加してくれたらいいと思っていたのが、会として動くようになるなんて」。新川さんはこう言って目を輝かせます。

避難者との交流は、普段から「アコール」で活動しているサークルのみなさんとも行われています。先日、すでに青森を離れ地元に戻られた避難者の方から元気なお便りが届きました。添えられていたのは、笑顔でがんばっている様子を伝える新聞記事。サークルのみなさんは語ります。「こんなにも積極的だった人からさえ、震災は気力や笑顔を奪っていたんですね。でも、私たちと出会ってこうなれたと言ってもらえて、私たちも元気が出ます」。

お互いを尊重し、大切にする気持ち。男女共同参画の根底にあるのは、そういった思いやりの気持ち。『男女共同参画都市』青森宣言」（このページ左下）にも、そんな思いが込められています。

アンジュールのSHIRAIさん

◆「結婚したい？　だったら、男性にお金を出したりしたらダメよ。男は女を守りたいんだから」（テレビのバラエティ番組で）。んっ?!　稼ぐのは男の責任？　お金を持っているのが男のプライド？　男性の皆さん、これって、キツくありませんっ？　この発言に真剣に耳を傾ける女性たち。「男性にも増える非正規雇用」の現実は…。そして、「女性の経済的自立」はどこへ行く…。

◆「男女共同参画が進まないと、青森市の未来はないよ。いろいろやってきて、ホントにそう思う」。こう言い切ったのは、60代の男性。男女共同参画の活動をしている方ではありません。そして、「女性が参画しないとしたら、それはなぜかを男も行政ももっと考えるべきだよ」。うんうんとうなずく男性たちがたくさんいて、私は感動してしまいました。考えるのは、女性もね。

●女性の悩み相談カダール相談室●

パートナーからの暴力で悩んでいる、自分自身の生き方や家庭のことで相談したいなど、あなたが抱えている悩みを相談員がお聞きします。

毎週月・木（祝日・年末年始・休館日を除く）
○電話相談　☎ 017(776)8850
○面接相談　10:00～12:00
13:00～16:00
＊面接相談は予約が必要です。
平日 9:00～18:00　☎017－776-8858

＜発行＞
青森市市民生活部市民協働推進課
男女共同参画室
〒030-8555　青森市中央 1-22-5
☎ 017(734)2296／FAX 017(734)5232

＜編集スタッフ＞
企画集団プティジュール：
白井壽美枝・沼田久美・藤川あきつ・阿部美智子

転載希望の方はご連絡ください。

男女平等意識（つづき）

出崎 自分が子育て真っ只中の頃と比べますと、当たり前のように子育てを楽しんでいるような男性方も見受けられますし、職種も男女に関係なく活躍している方々も増えています。また、生涯学習推進員としていろいろな相談を受けたりしていますが、男女問わず、自分の特技を活かして、時間をうまく使って活動されている方々も数多くいます。

ただ、実際、身近なところで子育てと仕事の両立に悩んでいる方々も多く見受けられます。私自身も、子どもたちを保育園に預けながら仕事してきて、やはり、子どもが病気になったとき、両立に悩み考えさせられることが多々ありました。認知症がどんどん進んでいってしまう母と、パーキンソン病がどんどん悪化してしまう父を抱えながら、私は何をやったらいいんだろうとも。幸い私の場合は、いろんな方々に助けられて、なんとか今の自分の生活を送ることができていますが、同じような立場の女性たちが、ゆっくり考える間もなく、身内からの重圧に負けて、私があきらめればいいのよね、とすぐに決断をしてしまい、後で、これでよかったのかなって悩んでる姿を見ると、私も胸が痛んでいるような状況です。

ワーク・ライフ・バランス WLB

会社としては、働き方の選択肢を増やせばいいんだと思います。

出崎 WLBは、本質的には個人個人の心の問題っていうことになるのかなと思いました。何をワークと考えていくかってをライフと考えて、何ということも、人それぞれだと思いますし、また、仕事のスキルアップのために、ある程度自分の時間を犠牲にして投資していくっていう時期も必要かもしれないですし、それを乗り越えた後に、今度はまた余裕も持てて、家庭や自分の時間に目を向けることもできるとか、日々、変化しているものなのかなと思います。

白井 WLBは、いつもいつも仕事と私生活をフィフティ・フィフティにっていうことではないんですよね。山あり谷あり、それでいいということですね。そしてWLBができ、両方に関われることで、いい仕事もできるし、いい人生も送れる。

本宮 WLBは、単純に仕事しすぎてたから生活を大事にしましょうっていうのもありですし、両方を両立したいんだっていうのもありです。ただライフだけを頑張りたいっていうのは、会社からするとちょっと合わないですかね。

会社としては、働き方の選択肢を増やせばいいんだと思います。やりたいときにやりたい形態を取れるように、器を作らなくちゃいけないんだと思っています。

僕自身も、毎日かなり遅くまで働いていた時期もありました。やっぱり、そういう時期って必ずあると思いますし、必要なんだと思います。でも、今ここに来て、4歳と1歳の子がいるとなると、やっぱり自然と週末は家で過ごそうとか、子供たちをお風呂に入れたいから早く帰りたいとか、考えるようになるんですよね。じゃあ、お風呂に入る時間までに帰るためには、今日これとこの仕事は終わらせようとか、効率を求めるようになるわけです。僕らがやらなくちゃいけないのは、そういう形態があってもいいよという選択肢を増やすことなんだと思います。

DV・セクハラ

やってる方がやったつもりがなければなくならないです。

沼田 私は家庭裁判所の調停委員をやっておりまして、DVが原因の離婚にもたくさん関わってきました。やはり、まだまだDVは多いです。外から見たら、いい夫婦だ、いい家庭だと思うところが、実際、家の中では何が起きてるかっていうのは本当にわからないんだなと痛感するんです。

今関わっているのも、妻に対してだけではなくて、娘に対しても殴る蹴る、それだけでないです――性的な暴行とか数知れずあって、しかもそれを楽しんでるんですね。ただ、長男は自分よりも体格が大きいので、自分より強い者には絶対に手をあげない。やはり、そこは男性の意識――女性は自分の所有物的な、妻だからいいだろうとか、弱い者にはけ口を求めるとか、そういうところをどうしたらいいんだろうと。

あとは、被害者と加害者の意識があまりに大きくかけ離れているなと。それは、セクハラでもそうです。こんなの別にいいんじゃないのとか、そういう意識で男性って軽くしゃべったり、手をかけたりするのかもしれないんですが、やられた方が嫌であればセクハラというのがセクハラなんです。もっと、やった方とやられた方の想像力ですよね、やられたらどんな思いになるのか、そういうことをもっともっと子どものときから、大人ももちろんですけど、そういう立場に立ったらどんな思いになるのか――そこが変えられない限り、なくしましょうって言っても、やってる方がやったつもりがなければなくならないですし、そういう大きな永遠のテーマが潜んでるなと思っています。

民の力っていうのもすごく大事かなと思っています。

出崎 自分が体験してきた子育てや介護のことになりますが、会議でお迎えギリギリに駆け込んだり、病気のときですとか、既存のものではなかなか当てはまらないことってどうしても出てくると思います。介護の場合でも、介護保険のサービスだけではまかないきれないところを請負う会社のスタッフに頼んで来てもらいましたし、ご近所の方にもお世話になりました。

どちらにしても、多様なニーズに応えられるようなサービスの必要性を感じますけれども、果たしてこれを、行政にすべてお願いしますってことでいいのかどうかということもあります。今、やはり、民の力っていうのもすごく大事かなとも思っています。地域のボランティアさんと関わっていてもそうなのですが、時間的にちょっと余裕があったり、今自分は生活に余裕があるから人のために何かしたいとか、そういうふうに思っている方も結構いるんだなと感じています。そういう力をうまく活かしていけるような、橋渡しというものがこれからは必要になってくるのではないかなと思っております。

沼田 やはり、子育てっていうのは、バランス的に女性の方にどうしてもなる。であれば、どうサポートするかですよね。子どもが病気になったとき、すぐ保育所から電話来ますよね、お迎えに来てくださいって。その熱を出して、病院に行くまでの時間をみてくれる公の、あまりお金のかからない、その熱が出た子をみてくれるところがあれば、それはすごくありがたいと思います。今、抜けられないんだとか、今日はダメなんだというときでも、どうしても行かなきゃいけないというのが、やはり、女性に思いっきり仕事をさせないブレーキになってる面がすごく大きいと思いますし、女性がもっともっと社会に進出していいポジションに就きましょうっていうのであれば、やはり、ネックは子どもですよね。その子どもをどうサポートするか。そこを、民間ももちろんですけど、費用的にかからないでサポートしていただきたい。

本宮 企業は利益追求――社会に利益というものを還元していくのが会社なので、それを度外視して、赤字で、例えば、すべての所得を介護中も全部みますなんてできないので、そこを段階的に変えていくためには、ある種、そういった経済面の一部は、行政が補てんできるのかどうかわかりませんけど、そういったところで企業と行政がタイアップしていくっていう構図を作れるのかな、作るべきだなと思います。

市に期待すること

（子育ての負担が）女性に思いっきり仕事をさせないブレーキになってる面が大きいと思います。